

## 平成5年度飼付け型栽培漁場管理技術開発事業(要約)

木村基文・渡辺利明・具志堅勝文\*

### 1. 中間育成

シマアジ種苗の輸送は、日本栽培漁業協会八重山事業場より1回目に全長33~45mmの種苗を29,000尾、2回目に全長27~41mmの種苗を34,000尾、活魚車を利用して行った。類結節症・ハダムシ症など魚病の発生により給餌制度をしたため全体的に成長が悪く、4月下旬に全長40mm前後であった種苗は9月下旬には尾叉長10cm前後に成長した。約5ヶ月間の中間育成での生残率は30%であった。中間育成期間中の水温は22~30℃であった。標識として左腹鱗の抜去を行った。

### 2. 飼付け試験

平成4年度と同様に海底生簀を飼付け基盤として屋叉長10cm前後の種苗を用い合計5回の放流を行った。海面から種苗を放流した場合には海底基盤に全く反応を示さなかった。海底馴致した種苗を放流すると、馴致期間の短い場合には海底から海底生簀まで垂直に滞留し、馴致期間の長い場合には海底生簀周辺のみ滞留した。しかし、飼付け期間は最長の放流群で約1ヶ月であった。

### 3. シマアジの漁獲実態調査

名護魚市場におけるシマアジ水揚げ量を1987年まで遡って調べた結果、毎年1トン前後の漁獲量が推定された。過去6年間で最も水揚げ量の少なかった年は1989年

(平成元年度)の400kgで、最も多かった年は(平成3年度)の1,100kgであった。

シマアジは主に尾叉長45cm以上の大型魚が底延縄・一本釣り・刺網で漁獲され、その他定置網には主に当歳魚が入網した。底延縄の漁場は先島諸島からトカラ列島付近、一本釣り・刺網の漁場は名護湾周辺であった。

平成元年・3年度放流群ともに平成5年度には再捕されなかった。

平成4年度放流群は約7ヶ月海底基盤に滞留した後4月下旬と6月下旬に逸散し、逸散直後から平成5年7月までに約400尾(150kg)漁獲され、約4%の再捕率であった。10月から再捕され始めた放流魚は4~6月に逸散したのではなく、放流海域に残留していたものであった。

平成5年度放流群は平成5年11月に飼付け基盤南方のマグロ生簀周辺の雑魚釣りにより1尾再捕された。

### 4. 天然シマアジに関する知見

シマアジの胃内容物にはツノガイ・稚ウニ類・カニ類等が見られた。

南西諸島海域には脊椎骨数25のAタイプシマアジと脊椎骨数24のBタイプシマアジが生息しているが、ほとんどAタイプシマアジでありBタイプシマアジは稀に見られる程度であろう。

\*非常勤職員